千葉商大紀要　第60巻　第2号（2022年11月）pp. 180-192

〔論　説〕

源氏物語の物語論と記紀神話（上）

杉浦一雄

目次

はじめに
一　源氏物語の物語論
二　紫式部日記の日本紀
三　源氏物語の日本紀
四　日本紀などはただかたそばぞかし
五　記・紀の対立

はじめに

『源氏物語』「蛍」の巻の〈物語論〉は、『源氏物語』という偉大な「物語」が「物語」が進行するなかで「物語」を論じるという稀有の論である。しかも、中年の男主人公・光源氏が物語に熱中する若い女性・玉鬘を相手に笑いながら語るというもので、冗談なのか真面目なのか、その位置づけが人によって分かれるところである。

もちろん、私もこれまでにこの〈物語論〉をたびたび論じてきた（1）が、とりわけ『源氏物語』で唯一「日本紀」という言葉が登場しており、しかも一見「日本紀」を否定するかのような言いまわしがなされるなど、〈物語論〉は私にとって避けて通ることのできない障壁なのである。

これまで『源氏物語』と『日本書紀』との関係について論じてきた（2）私が、つづいて今回『源氏物語』と『古事記』との関係に言及することによって、〈記紀神話〉が『源氏物語』の源泉であると結論するに至った。今こそ、満を持して発言すべきときがやって来たのである。

そこで、ここではあらためて『源氏物語』の〈物語論〉を取り上げ、なかでも、

日本紀などはただかたそばぞかし。

という言葉にこだわって論じてみたいと思う。

一　源氏物語の物語論

そもそも『源氏物語』「蛍」の巻におさめられた〈物語論〉とはどのようなものなのであろうか。

光源氏は、夕顔の忘れ形見である玉鬘を自分の娘として六条院に迎え入れ、その世話に余念がなかった。五月、五月雨が例年になく降りつづき、つれづれのすさびに物語を読むことに熱中しているとき、玉鬘を訪ねてきた光源氏は、物語に熱中する玉鬘を相手に「物語」について論を展開、その挙句には物語にかこつけて自分の心情を述べ、口説いてみせようとする。

そのなかで、源氏はおおよそ次のような〈物語論〉を展開する。（3）

数ある物語の中に本当のことは至って少ないであろうに、一方ではそのことをよくわかっていながら、このようなとる

にたりない話に人はうつつを抜かし、真に受けたりしているものだ。なるほど、このような昔の世の物語ででもなくては、どうして紛らわしようのない所在なさを慰めるすべはあるまい。それにしても、こうした数々の作り話の中にも、なるほどそんなこともあろうかとしみじみとしながら、わけもなく心が動かされ、そんなことはまったくありそうもないことだと思いながらも、読み進めてゆくうちに、大げさに誇張してあるところでは思わず目を奪われたりして、ふと、思いがけず感心させられるところが語られているものだ。そもそも神代の昔から世の中にあることを書き記しておいたもののようだ。「日本紀」などはほんの一面にしかすぎない。これら物語にこそ、道理にも叶い、委曲を尽したことが書かれているのだろう。よいことであれ悪いことであれ、この世を生きてゆく人の有様で、見ても見飽きず、聞いても聞き流しにできないことや、後の世にまでも語り伝えさせたい数々の事柄を心ひとつに包んでおくことができずに、言いおいたのが物語のはじまりなのだ。物語の中の人物のことをよく言おうとする場合にはそのよいことだけを選び出し、また悪く言おうとする場合には悪くてまったくありそうもないようなことを取り集めて語るものだが、その善と悪とはみないずれも本当のことで、この世にないことではないのだ。異国の物語でさえ、その書きようはわが国のものと違っているし、同じ日本の物語であっても、昔のと今のとでは当然違っていて、その内容に深い浅いの相違はあるだろうが、それらをむやみに嘘だ、作り事だと言ってしまっては、物語の実情を無視したことになってしまう。仏法にも、方便ということがあって、悟りのない者はあちこちが矛盾するという疑いをきっと抱くに違いないが、煎じ詰めれば結局は同一の趣旨によっているのであって、菩提と煩悩との隔たりというものは、丁度物語の中の善人と悪人との相違ぐらいしかないのだ。結局、物語もそうだが、よい意味に解すれば、すべてどんなことでも無益なものはないということになるのだ。

「蛍」の巻の〈物語論〉は、おおよそ以上のようなものとして記されている。

さて、この〈物語論〉は、これまでどのようなものとして評価されてきたのであろうか。

まず、研究史を辿ってみると、この〈物語論〉には紫式部が『源氏物語』を書いた「大意」あるいは「本意」が示されているという見解が『海河抄』以来大勢を占めて来ていることが知られる。

此物語一部の大意作者已証のおもむき是にみえたり
四辻善成『海河抄』（4）

源氏一部の意この一たんにいへるがごとし
一条兼良『花鳥余情』（5）

紫式部此物語を作せる大意をあげていへり
三条西実隆『細流抄』（6）

本居宣長もまたこれらを受けるかたちで次のように発言している。

紫式部が、此物語かける本意は、まさしく螢巻にかきあらはしたるを、それもたしかにさとはいはずして、例のふる物語のうへを、源氏君の、玉かづらの君に、かたり給ふさまにいひて、下心に、この物語の本意をこめたり
本居宣長「源氏物語玉の小櫛」（7）

〔現代語訳〕紫式部がこの物語を書いた本意は、まざれ

もなく「螢」の巻に書きあらわしてあるが、それもあらわにそうとはいわず、例の古物語について光源氏が玉鬘（たまかずら）に語ってきかせる趣にして、暗にこの物語の本意をこめている。（8）

宣長は、ここ〈物語論〉に『源氏物語』の「本意」つまり真の意図が込められていることを明言したのである。

しかし、こうした従来からの見方に対して、後世真っ向から異を唱える見解が出された。

物語や小説の主題は、その物語・小説という表現・描写そのものを通じて語られているのが普通のことで、物語・小説の途中で、作者がわざわざこの物語・小説の主題はこれこれであるという論をしたり、説明をすることはあまり例のないことである。しかし、一篇の作品の中で、終末近くに見られることが多いようであるが、さりげなく主題を語っている例が全くないわけではない。だから、『源氏物語』の主題が物語の中で語られることがありえないとは思わないが、螢の巻はそういうものを語るに相応しい巻であろうか。ここでこの物語の主題が語られることには必然性はない。螢の巻というような巻の中に、『源氏物語』の本意を語っている言葉を求めようとすることは、物語・小説というものの機能や構造の基本的な性格を無視しすぎているのではないかと思われる。螢の巻のこの論の中に、「源氏物語のまなこ」というほどのことが書かれていては却って不自然である。（中略）螢の巻の論は、「物語というものは」という「物語論」であって、「源氏物語論」ではない。従ってこの論には、物語というものの基本的性格が陳べられることはあるが、特定の作品としての『源氏物語』の本意（主題）が論じられることはありえない。

阿部秋生「「もののあはれ」の論」（9）

一体ここで言われていることは何か。螢巻という文脈のなかにあくまで置いて読まなければならない。この部分だけをとり出してわれわれも源氏と一緒になって、〝物語〟を論ずるようであっては、どこか深読みをみずからに許すことになる。（中略）いったい『源氏物語』ほどの雄大かつ複雑な物語作品が、その創作意図の全貌を、玉鬘あいてに、一～二頁ほどのことばで、語りつくせるものであろうか。源氏のことばは、物語享受者の心得を述べているものであって、物語の創作意図にまでほんとうに立ち入っているといえるか、疑問なしとしない。光源氏は、もっとも良質の享受者であっても、ついに創作者ではないはずである。

藤井貞和「物語論」『講座源氏物語の世界』（10）

阿部秋生氏は、この「物語論」において『源氏物語』の「本意（主題）」が語られる必然性がないどころか、語られていては逆に「不自然」だとされ、「螢」の巻に述べられた物語論はけっして特別なものではなく、むしろ一般論であって、『源氏物語』そのものを論じたものなどではありえない、とされた。

また藤井貞和氏は、「螢」の巻の「物語論」は「物語享受者の心得」を述べたものであって、『源氏物語』の創作意図を述べたものではないとして、『源氏物語』ほどの雄大かつ

複雑な物語が、その創作意図の全貌を玉鬘相手にわずかのことばで語り尽くせる筈はない、とされた。

つまり、両氏はいずれもこの「物語論」には『源氏物語』の「主題」も「創作意図」も語られてはいないと結論されたのであった。

このように、「蛍」の巻をめぐっては、『源氏物語』の「大意」あるいは「本意」について触れているとする見方がある一方、『源氏物語』とは関係なく物語一般について論じられているだけで、『源氏物語』の創作意図などには触れられていないとする見方とに大別されていることが知られる。

すなわち、この〈物語論〉は一方では作者自身が『源氏物語』の本質を開示した「源氏物語論」として高く評価されながらも、その一方では『源氏物語』とは直接かかわることなく、物語というものを論じた「一般論」と見做され、その評価はまさに両極端としか言いようがないのである。

たしかに、この〈物語論〉は分量としてはわずかなものであるにも拘らず、物語の多様な側面について、きわめて簡潔に表現されているため、即座に意味の取りにくい難解な表現がいくつも見受けられるのも事実である。それゆえ、〈物語論〉を高く評価し、ここに『源氏物語』の本質があると説く見解にしても、「大意」「本意」の実態については不明としかいいようがなく、だからと言って、『源氏物語』の創作意図を述べたものではないと説く見解にしても賛同はし難く、ひとつの論としてどうなのかと思う次第である。

つまり、〈物語論〉はその難解できわめて暗示的な表現に阻まれて、紫式部がここに込めた真意は今もって解明されているとは言い難いのではないか。

二　紫式部日記の日本紀

『源氏物語』の作者である紫式部をめぐっては二つの「日本紀」が存在している。

その一つは『紫式部日記』に記された一条天皇のご発言においてである。

> 内裏（うち）のうへの、源氏の物語人に読ませたまひつつ聞こしめしけるに、「この人は日本紀（にほんぎ）をこそ読みたるべけれ。まことに才（ざえ）あるべし」と、のたまはせける……。
>
> （中野幸一校注・訳「紫式部日記」）（11）

〈現代語訳〉主上が、『源氏の物語』を人にお読ませになられてはお聞きになっていたときに、「この作者はあのむずかしい〝日本紀〟をお読みのようだね。ほんとうに学識があるらしい」と仰せられた……。

あるとき、一条天皇がお供の者に『源氏物語』を読ませてはお聴きになりながら、次のようにご発言されたという。この『源氏物語』の作者は「日本紀」をお読みのようだ。まことに学識があるらしい、と。主上が『源氏物語』とその作者をお褒めしたのである。

このとき「日本紀」という語が用いられている。

一条天皇は『源氏物語』を聴きながら、「長恨歌」でも『白氏文集』でもなく、「日本紀」すなわち『日本書紀』の紛れもない影響をみてとったのである。

これは異相外のご発言である。しかし、だからといって紫式部自身がみずからの『日記』に誇らしげに書き記している以上誤りとは判断できない。

すなわち、『源氏物語』が「日本紀」と並々ならぬ関係にあることを一条天皇は見抜いていたのである。

これまで、ここにいう「日本紀」は『日本書紀』とはいっても『日本書紀』をはじめとする「六国史」「官撰国史」「漢文体の歴史書」「国史一般」などと拡大解釈され、「日本紀」が『源氏物語』とかかわることに言及するどころか、このご発言自体を見当はずれなものと見做す見解さえ提示されてきたのである。

しかし、これに対して私は、ここにいう「日本紀」はあくまでも『日本書紀』のみを指し、『日本書紀』のなかでもとりわけその〈神話〉に着目することによって、『源氏物語』がその主要な人物から主要な出来事に至るまで『日本書紀』「神代」の全体を意図的に踏まえ、それを源泉として創作された「物語」ではないかという仮説を展開したのである。

『源氏物語』が創作されるにあたって踏まえられた作品は夥しい数にのぼっていようが、そのほとんどは部分的、表面的な影響であって、『日本書紀』のように『源氏物語』の根幹部分に位置し、内部から一貫して支えているものは他に見当たらない。すなわち、『日本書紀』は『源氏物語』にとって最も本質的な源泉であり、源泉中の源泉だと考えるに至ったのである。

これによって、一条天皇のいう「日本紀」は『日本書紀』をはじめとする「六国史」「官撰国史」「漢文体の歴史書」「国史一般」などではなく、まぎれもなく『日本書紀』のみを指していると理解することが可能となり、一条天皇のご発言の正しさが裏付けられたことになったといえよう。

一条天皇のご発言は、決して見当はずれなものではなく、むしろ『源氏物語』の本質をうがった稀にみる卓見として高く評価すべきご発言だったと判断したのである。

私の研究はこのご発言を正当に受け取ってはじめたもので、これは、私の源氏研究の出発点ともなっているということができよう。

三　源氏物語の日本紀

ところが、紫式部の人生にはもう一つ「日本紀」という言葉が関係している。

紫式部自身が『源氏物語』「蛍」の巻、しかも〈物語論〉のただなかに記した「日本紀」がそれである。

それは光源氏の言葉として次のように記されている。

「骨（こち）なくも聞こえおとしてけるかな。神代（かみよ）より世にあることを記しおきけるななり。日本紀などはただかたそばぞかし。これらにこそ道々しくくはしきことはあらめ」とて笑ひたまふ。　（『源氏物語』「蛍」の巻）（12）

〈現代語訳〉「いかにもぶしつけなことを申して物語をけなしてしまいましたね。物語というものは神代からこのかた世間に起ったことを書き残したものだといいます。日本紀などはほんの一面にすぎないのです。これら物語にこそ、道理にもかない、委曲を尽した事柄が書いてあるのでしょう」と言ってお笑いになる。

ここで紫式部は「日本紀」などは神代からこのかた世間に起ったことのほんの一面を書き記したにすぎないことを述べ、物語にこそ道理にもかない、委曲が尽くしたことがあると断じているのである。

一体これまでに「日本紀などはただかたそばぞかし。」はどのように訳されてきたのであろうか。代表的と思われるものを挙げてみよう。

日本紀などはたゞ片端を述べてゐる……。
（谷崎潤一郎・新訳『源氏物語』巻五）（13）

日本紀などはほんの一面にすぎないさ。
（玉上琢彌『源氏物語評釈』第五巻）（14）

日本紀などはほんの片はしにすぎないものです。
（阿部秋生　秋山虔　今井源衛校注・訳『源氏物語』三〈日本古典文学全集〉）（15）

正史とされている日本紀などは、そのほんの一部分にすぎないのさ。
（円地文子・訳『源氏物語』巻五）（16）

日本紀といつた歴史の書物などは、ほんの一端をしかしるしてゐないんだ。
（今泉忠義・訳『源氏物語』現代語訳五）（17）

日本紀などは、ほんの片端にすぎないものです。
（石田穣二・清水好子校注『源氏物語』四〈新潮日本古典集成〉）（18）

日本紀などはその一部分にすぎなくて……。
（与謝野晶子・訳『源氏物語』）（19）

日本紀などは、ただ、片端を述べただけどすやろ。
（中井和子・訳、現代京ことば訳『源氏物語』二）（20）

日本紀などはほんの一面にすぎないのです。
（阿部秋生　秋山虔　今井源衛　鈴木日出男校注・訳『源氏物語』③〈新編日本古典文学全集〉）（21）

正史といわれる日本紀などは、そのほんの一面しか書いてないのです。
（瀬戸内寂聴・訳『源氏物語』巻五）（22）

日本紀などは、ほんの一端を記したものに過ぎないのですよ。
（佐藤定義・訳『源氏物語』7）（23）

日本紀などは、ほんの一面を伝えるのにすぎません。
（室伏信助編『源氏物語の鑑賞と基礎知識』〈国文学「解釈と鑑賞」別冊〉、No.18初音・胡蝶・螢）（24）

朝廷の正史とされている日本紀（日本歴史）などは、如何にもほんの一部分に過ぎないものです。
（上野榮子・訳『源氏物語』第四巻）（25）

いや、考えてみれば、あの日本紀などの真らしい史書にしてからが、あれで社会のほんの一面を書き綴ったにすぎないのさ。
（林望『謹訳 源氏物語』五）（26）

これらによれば、「ただかたそば」という言葉は「たゞ片端」「ほんの一面」「ほんの片はし」「ほんの一部分」「ほんの一端」「ほんの片端」「一部分」「ただ、片端」などと訳されていることがわかる。

ということは、「かたそば」があるからといって「日本紀」自体をきっぱりと否定したわけではないことがわかり、全面的な否定ではなく、あくまでも部分的な否定にとどまるということが知られるのである。

ここで紫式部は「日本紀」が世の中のほんの一面にしかすぎないことをまるで吐き捨てるような言葉遣いで明言している。

『紫式部日記』のなかで誇らしげに記した「日本紀」を、式部は『源氏物語』のなかで明らかに貶めているのである。

四　日本紀などはただかたそばぞかし

そもそも「日本紀などはただかたそばぞかし。」の「かたそば」という語を辞書で引いてみると、「①物の一方のはし。片はし。②物事の一部分。一面。一端。」（『大辞林』第四版）(27)とあり、「日本紀」はもちろん全体ではないものの、「かたそば」ではあるということがわかる。

『源氏物語索引』によると、「かたそば」という語の用語例は『源氏物語』の「明石」「蛍」「梅枝」「若菜上」「紅梅」「総角」「蜻蛉」にそれぞれ一例ずつあり、あわせて「七例」あることが知られる。(28)

たとえば、次の例文である。

……いとほしければ、いとどほけられて、昼は日一日寝をのみ寝暮らし、夜はすくよかに起きゐて、「数珠の行く方も知らずなりにけり」とて、手をおしすりて仰ぎゐたり。弟子どもにあはめられて、月夜に出でて行道するものは、遣水に倒れ入りにけり。よしある岩の片そばに、腰もつきそこなひて病み臥したるほどになん、すこしもの紛れける。

（『源氏物語』「明石」の巻）(29)

〈現代語訳〉……入道は娘が不憫で、いよいよ虚けたようになって、昼は一日じゅう寝て暮し、夜になるとしゃんと起きていて、「数珠の置き場所を忘れてしまった」と言って、掌をすり合せて仏を仰いですわっている。弟子たちにばかにされて、月夜に出て行道しようとしたところ、これはしたり、遣水の中にころげ落ちるという始末なのであった。風流な岩の角に腰を打ちつけ怪我をして寝ついていた間だけは、痛みに少し悲しみも紛れるのだった。

ここに「かたそば」の語が用いられている。

光源氏が帰京する喜びとは裏腹に、偏屈者で知られる明石の入道が徹底的に戯画化されて描かれている。月夜の晩に行道しようとして遣水の中に落ち、岩の角に腰を打ちつけ怪我をして寝ついてしまったというのである。

入道がどのように腰を打ちつけたかは明らかではないが、岩はたいてい半面を下にして置いてあるため、腰を打ちつけたのは「岩の角」少なくともせいぜい岩全体の数十パーセントに及んでいる。それが「岩の片そば」の語となっているのである。

さらに次の例文である。

紫の上を前にした源氏がご機嫌ななめの紫の上を気づかいながらも、女三宮からの手紙を見せまいとする場面である。

紅の薄様にあざやかにおし包まれたるを、胸つぶれて、御手のいと若きを、しばし見せたてまつらであらばや、隔つとはなけれど、あはあはしきやうならんは、人のほどかたじけなし、と思すに、ひき隠したまはむも心おきたまふべければ、かたそば広げたまへるを、後目に見おこせて添ひ臥したまへり。

（『源氏物語』「若菜上」の巻）（30）

〈現代語訳〉紅の薄様の紙に目もあざやかに包んであるので、傍らの女君の手前胸がどきりとして、「宮の御筆跡がまったく幼いのを、しばらくはお見せしないでおきたいものだ。他人行儀に分け隔てをするというのではないけれど、浮ついてみえるのだったら、ご身分からして畏れ多いことになる」とお思いになるが、お手紙をいきなりお隠しになっては女君が気まずくお思いになるだろうから、端のほうをひろげていらっしゃると、女君は横目でそれをごらんになりながら、物に寄り臥していらっしゃる。

ここに「かたそば」の語が用いられている。

女三宮のあまりにも幼稚な筆跡をそばにいる紫の上になるべく見られないようにしたい。だからといって急に見せないというのもどうかと思って、見せるような見せないような、源氏が女三宮からの手紙の端のほうを広げているという場面である。そこに「かたそば」の語が用いられている。

手紙は分け隔てをしないように広げてはいるものの、「片はし」あるいは「一端」を広げているのである。

「かたそば」という語は物事のすべてではないものの、「片はし。」（『源氏物語辞典』）（31）「片端（かたはし）。」（『日本国語大辞典　第二版』）（32）「片側」（『古語大鑑』）（33）を意味し、「一端。一部分。」（『古語大辞典』）（34）を意味する語でもある。「物事の一面。わずかな一部分。」（『岩波古語辞典』）（35）あるいは「ほんの一部分。」（『角川古語大辞典』）（36）であって、けっして全面的な否定ではないのである。

「かたそば」は漢字で「片傍」あるいは「片側」と書くように、片はしではあるものの、片面ではあるということだ。物事のせいぜい半分にも満たない大きさだが、存在していることは確実なのである。それゆえ、この表現だけを見て、「日本紀」の全面的な否定と受け取るのは明らかに間違えということができよう。

では、「日本紀などはただかたそばぞかし。」における「日本紀」は「日本紀」だとしてもう片端、すなわち「日本紀」のもう一方の「かたそば」となるのは何などであろうか。

もちろん「物語」、〈女子どもの親しむ有象無象の物語〉が入るのは当然なのだが、どのようなものを想定すればよいのであろうか。

そもそも〈物語論〉が難解であるのは、この〈女子どもの親しむ有象無象の物語〉の実態が何なのかわからないことが挙げられる。

このことについて、私は次のように想定している。

実は、作者は『日本書紀』に対して『古事記』を考えていたのではなかろうか。

今日、一般的には『古事記』は『記』『紀』と並び称されるように、むしろ、正史とされる『日本書紀』に準ずる最初

の著作であり史書の一部として扱われている。

ところが、『源氏物語』が書かれた時代には、『日本書紀』は「正史」と扱うものの、むしろ『古事記』は〈女子どもの親しむ有象無象の物語〉の仲間、その筆頭にくるべき「物語」と受け取られてきたのではないか。

「神代より世にあることを記しおきけるなり。」

物語というものは神代からこのかた世間に起ったことを書き残したものだというのは〈記紀神話〉を意味し、「日本紀などはただかたそばぞかし。」と発言しているように、「物語」は〈記紀神話〉のなかでも『古事記』を意味していると受けとることができるのである。

そこで、『源氏物語』の作者が「日本紀などはただかたそばぞかし。」というとき、『日本書紀』と同等に、互角に対峙できる、すなわち『日本書紀』の「かたそば」となり得る作品は『古事記』以外には考えられないのではなかろうか。

五　記・紀の対立

『記』『紀』が対立的であることは〈玉鬘十帖〉で確認することができる。

いわゆる〈玉鬘十帖〉は以下のように並んでいる。

「玉鬘」――『日本書紀』神功皇后が筑紫に下向し都へ舞い戻る。（『日本書紀』におもに存在する話）
「初音」
「胡蝶」
「蛍」――〈物語論〉
「常夏」
「篝火」
「野分」
「行幸」
「藤袴」
「真木柱」――『古事記』スサノヲのもとからオホクニヌシによってスセリビメが奪い去られる。（『古事記』にだけ存在し、『日本書紀』にない話）

〈物語論〉は「蛍」の巻にある。言わば〈玉鬘十帖〉は〈物語論〉の容れ物だ。

容れ物のはじめで、玉鬘が幼い日筑紫へと下り、そこで成長、ところが、保護者に死に別れ、敵対する者たちのなかに取り残される。美しかったものだから土地の豪族に目をつけられ、追っ手から逃れていのちからがら都に帰りつく。ここまでの玉鬘の筑紫流離の物語には『日本書紀』にある神功皇后の筑紫下向の物語が基になっていることはすでに指摘している。(37)

神功皇后は第一四代仲哀天皇の皇后であり、第一五代応神天皇の生母である。『記』『紀』のいずれにも登場しているものの、「神功皇后」という名称すらない『古事記』とは違って、『日本書紀』では皇太子の摂政として七〇年近く政務をとるなど皇后としては異例の一巻を得ている。皇后でありながら、帝紀一代があるのは神功皇后のみであって、神功皇后は『日本書紀』を代表する人物とみてよい。

これに対して、〈玉鬘十帖〉という容れ物の終わりには、光源氏の目を盗んで鬚黒大将が玉鬘を奪い去る話がある。この話は根之堅州国へとわたったオホアナムヂノカミのちのオ

ホクニヌシノカミがスサノヲノミコトの娘であるスセリビメを奪い去る話を踏まえていることはすでに指摘した通りである。(38)

スセリビメは、スサノヲノミコトの娘とされるが、『古事記』にしか登場しない話で、『古事記』を代表する人物だといえよう。

この両者をつないでいるのは玉鬘という女性である。

玉鬘は、幼くして九州の地をへめぐり、再び都に舞い戻るという大旅行を経験している。それだけでなく、光源氏の手を離れ、鬚黒大将のもとに奪い去られることによって六条院をあとにしている。玉鬘は、容れ物のはじめで神功皇后に扮し、容れ物の終わりでスセリビメを見事につとめあげている。それをひとりの人物に演じされるということに作者の意図は明確なはずだ。

すなわち、容れ物のはじめで『日本書紀』を踏まえ、容れ物の終わりで『古事記』を踏まえる。ここには、『記』『紀』の対立があるとみてよかろう。

そう考えるならば、「日本紀などはただかたそばぞかし。」の「かたそば」に相当するのは「物語」、〈女子どもの親しむ有象無象の物語〉だが、片がわにあるものとしてその筆頭の作品を求めるなら『記』『紀』の対立から『古事記』を考えてもよいのではなかろうか。「かたそば」、もう片側にあるものとは『古事記』のことだったのではなかろうか。

注

(1) 杉浦一雄「源氏物語の創造」中央大学附属高等学校『教育・研究』第一〇巻、一九九六年一二月。

杉浦一雄「源氏物語と物語の起源」『千葉商大紀要』第三八巻第二・第三合併号、二〇〇〇年一二月。

杉浦一雄「源氏物語と聖徳太子伝暦」『千葉商大紀要』第四六巻第一・第二合併号、二〇〇八年九月。

(2) 杉浦一雄「日本紀と源氏物語」中央大学附属高等学校『教育・研究』第五号、一九九一年一二月。

杉浦一雄「源氏物語の源泉」『千葉商大紀要』第三七巻第四号、二〇〇〇年三月。

杉浦一雄「源氏物語と根の国」『千葉商大紀要』第三八巻第一号、二〇〇〇年六月。

(3) 以下は、阿部秋生　秋山虔　今井源衛　鈴木日出男校注・訳『源氏物語』③〈新編日本古典文学全集〉、小学館、一九九六年、二一〇～二一三頁の〈現代語訳〉を要約したものである。

(4) 四辻善成「海河抄」巻一〇（螢）、四〇九頁。

(5) 一条兼良「花鳥余情」巻一四（螢）、中野幸一編『花鳥余情　源氏和秘抄　源氏物語之内不審条々　源語秘訣　口伝抄』第二巻〈源氏物語古註釈叢刊〉、武蔵野書房、一九七八年、一八二頁。

(6) 三条西実隆『細流抄』巻五（螢）「その人のうへとて」条。

(7) 本居宣長「源氏物語玉の小櫛」一の巻、『本居宣長全集』第四巻、責任編集・大野晋、筑摩書房、一九六九年、一八六頁。

(8) 本居宣長「源氏物語玉の小櫛」〈日本の名著〉『本居宣長』、責任編集・石川淳、中央公論社、一九七〇年、西郷信綱・訳、三八八頁。

(9) 阿部秋生「「もののあはれ」の論」『源氏物語の物語

論――作り話と史実――』、岩波書店、一九八五年、一四七・一五六頁。

(10) 藤井貞和「物語論」『講座源氏物語の世界』第五集、有斐閣、一九八一年、一六一頁。

(11) 藤岡忠美　中野幸一　犬養廉　石井文夫校注・訳『和泉式部日記　紫式部日記　更級日記　讃岐典侍日記』〈新編日本古典文学全集〉、小学館、一九九四年、二〇八頁。

(12) 阿部秋生　秋山虔　今井源衛　鈴木日出男校注・訳『源氏物語』③〈新編日本古典文学全集〉、小学館、一九九六年、二一二頁。

(13) 山田孝雄校閲、谷崎潤一郎・新訳『源氏物語』巻五、中央公論社、一九五二年、一六頁。

(14) 玉上琢彌『源氏物語評釈』第五巻、角川書店、一九六五年、三三五頁。

(15) 阿部秋生　秋山虔　今井源衛校注・訳『源氏物語』三〈日本古典文学全集〉、小学館、一九七二年、二〇四頁。

(16) 円地文子・訳『源氏物語』巻五、新潮社、一九七三年、二四頁。

(17) 今泉忠義・訳『源氏物語』現代語訳五、桜楓社、一九七五年、四二頁。

(18) 石田穣二・清水好子校注『源氏物語』四〈新潮日本古典集成〉、新潮社、一九七九年、七四頁。

(19) 与謝野晶子・訳『源氏物語』、河出書房新社、一九八八年、二八九頁。

(20) 中井和子・訳、現代京ことば訳『源氏物語』二、大修館、一九九一年、七八六頁。

(21) 阿部秋生　秋山虔　今井源衛　鈴木日出男校注・訳『源氏物語』③〈新編日本古典文学全集〉、小学館、一九九六年、二一二頁。

(22) 瀬戸内寂聴・訳『源氏物語』巻五、講談社、一九九七年、二三頁。

(23) 佐藤定義・訳『源氏物語』7、明治書院、一九九八年、二八頁。

(24) 監修・鈴木一雄／編集・室伏信助『源氏物語の鑑賞と基礎知識〈国文学「解釈と鑑賞」別冊〉、No.18 初音・胡蝶・螢、至文堂、二〇〇一年、二一四頁。

(25) 上野榮子・訳『源氏物語』第四巻、日本経済新聞出版社、二〇〇八年、七二頁。

(26) 林望『謹訳 源氏物語』五、祥伝社、二〇一一年、三一頁。

(27) 松村明編『大辞林』第四版、三省堂、一九八八年初版発行、二〇一九年第四版発行、五一八頁。

(28) 柳井滋　室伏信助　鈴木日出男　藤井貞和　今西祐一郎編『源氏物語索引』〈新日本古典文学大系〉別巻、岩波書店、一九九九年、一五七頁。

(29) 阿部秋生　秋山虔　今井源衛　鈴木日出男校注・訳『源氏物語』②〈新編日本古典文学全集〉、小学館、一九九六年、二七一頁。

(30) 阿部秋生　秋山虔　今井源衛　鈴木日出男校注・訳『源氏物語』④〈新編日本古典文学全集〉、小学館、一九九六年、七二頁。

(31) 北山谿太編『源氏物語辭典』、平凡社、一九五七年、二二三頁。

(32) 『日本国語大辞典　第二版』第三巻、小学館、

一九七二年、縮刷版一九七九年、第二版二〇〇一年、七一六頁。

(33) 編集委員会代表・築島裕編『古語大鑑』第二巻、東京大学出版会、二〇一三年、八八頁。

(34) 中田祝夫　和田利政　北原保雄編『古語大辞典』、小学館、一九八三年、三六四頁。

(35) 大野晋　佐竹昭広　前田金五郎編『岩波古語辞典』机上版、岩波書店、一九七四年、二九九頁。

(36) 『角川古語大辞典』第一巻、角川書店、一九八二年、七七六頁。

(37) 杉浦一雄「玉鬘と神功皇后―玉鬘流離の源泉―」『千葉短大紀要』第二二号、一九九五年一二月。

(38) 杉浦一雄「源氏物語と古事記神話（一）」『千葉商大紀要』第五四巻第二号、二〇一七年三月。
杉浦一雄「源氏物語と古事記神話（二）」『千葉商大紀要』第五五巻第一号、二〇一七年九月。
杉浦一雄「源氏物語と古事記神話（三）」『千葉商大紀要』第五六巻第一号、二〇一八年七月。
杉浦一雄「源氏物語と古事記神話（四）」『千葉商大紀要』第五七巻第三号、二〇二〇年三月。
杉浦一雄「源氏物語と古事記神話（五）」『千葉商大紀要』第五八巻第三号、二〇二一年三月。

（二〇二二・九・二〇受稿、二〇二二・一一・七受理）

〔抄　録〕

源氏物語の物語論と記紀神話（上）

杉浦　一雄

『源氏物語』「蛍」の巻の〈物語論〉は、『源氏物語』という偉大な「物語」が「物語」が進行するなかで「物語」を論じるという稀有の論である。とりわけ『源氏物語』で唯一「日本紀」という言葉が登場し、一見「日本紀」を否定するかのような言いまわしがなされているなど私にとっては避けて通ることのできない障壁なのである。

これまでにも『源氏物語』と『日本書紀』との関係について論じ、つづけて今回『源氏物語』と『古事記』との関係に言及することによって、私は〈記紀神話〉が『源氏物語』の源泉であると結論するに至った。

そこで、ここではあらためて『源氏物語』の〈物語論〉を取り上げ、なかでも、

日本紀などはただかたそばぞかし。

という言葉にこだわって論じてみたいと思う。

紫式部の人生には二つの「日本紀」がかかわっている。

その一つが紫式部自身が『源氏物語』「蛍」の巻〈物語論〉のただなかに記した「日本紀」である。紫式部は物語というものは神代からこのかた世間に起ったことを書き残したもので、「日本紀」などはほんの一面にすぎないことを述べ、物語にこそ道理にもかない、委曲を尽くしたことがあると断じている。

ここにいう「かたそば」とは物事のすべてではないものの、「片はし」「片がわ」ではあることを意味している。

では、「日本紀」の「かたそば」における「日本紀」のもう一方の「かたそば」となるのは何なのであろうか。

「日本紀」の「かたそば」として「日本紀」と同等の価値をもつ「神代からこのかた世間に起ったことを書き記したもの」とは『古事記』を想定することができ、『古事記』以外には考えられないのではなかろうか。

今日、一般的には『古事記』は『記』『紀』と並び称されるように、むしろ、正史である『日本書紀』に準ずる最初の著作であり史書の一部として扱われている。

ところが、『源氏物語』が書かれた時代には、『日本書紀』は「正史」として扱いながらも、『古事記』は「物語」の仲間、その筆頭にくるべき「物語」と受け取られてきたのではないか。

そこで、『古事記』は『日本書紀』と対立的だったのではなかろうか。

「蛍」の巻を含むいわゆる〈玉鬘十帖〉には、『記』『紀』が対立的に描かれている。

〈玉鬘十帖〉の最初で筑紫に流離した玉鬘は、〈玉鬘十帖〉の最後では夫である鬚黒大将に奪い去られることになる。これは、神功皇后とスセリビメという『記』『紀』の対立であり、「日本紀などはただかたそばぞかし。」の「日本紀」の「かたそば」に位置するものとは、「物語」の筆頭である『古事記』を指すことを意味するのである。